

柘植 彩子 氏の学位審査結果の要旨

主査：中村 加枝

副査：木下 利彦、浅井 昭雄

パーキンソン病（Parkinson's disease : PD）や進行性核上性麻痺（progressive supranuclear palsy : PSP）などの神経変性疾患の非運動症状のひとつとして体重減少がしばしば観察される。しかし、体重減少が疾患そのものによるのか、振戦や筋強剛などの運動症状によるのか、食事量の減少やうつ・嚥下障害・消化管機能障害・薬剤の副作用など二次的に起こっているのか一定の見解は得られていない。今回著者らは嚥下障害などの二次的な要因を排除するため発症早期に着目して、PD と PSP 患者を比較し経時的な体重変化を検討した。

その結果、発症早期の PD 患者では有意な体重変動がなかったのに対して、PSP 患者では有意な体重減少がみられ、両疾患は体重調節という非運動症状の観点からも異なる疾患であることが示された。PSP 患者は抗パーキンソン病薬を服用しておらず、薬剤による体重減少は否定された。体重が減少する要因としては筋強剛によるエネルギー消費の増加、消化管からの吸収障害によるエネルギー摂取の低下、視床下部の神経ペプチドや体脂肪量の調節を行うレプチンなどの関与が考えられた。

本研究は二次的な要因の少ない発症早期に注目して PD と PSP とを比較し経時的な体重変化を検討した初めての報告である。体重測定という簡便な方法によって時に鑑別が困難な両疾患の診断、PSP の病態解明に寄与しうる報告であり、学位に値すると考える。